

厳格さを声高に主張しない自然の中の伽藍配置



Photographs by MIZUNO Naoki

大乘寺 (金沢市)

唐

突ではあるが、松林図屏風の
ことを思い浮かべてみていた
きたい。あの、長谷川等伯筆の国
宝である。

白い空間の中に黒い塊が浮かんで
いる。じつと眺めていると、霞のな
かに松林の姿がほのかに浮かび上
がる。霞は拡がり、見る者もその中
に包まれる。屏風に近づくと、松か
と思われた描筆は画布に叩きつけら
れた墨の固まりにしか過ぎない。また、
屏風から離れ眺める。漂い続ける霞
の流れに従い、先ほど見た松林とは
また違った姿が立ち現れる。不定形
に流れゆく情景が、現れては消えて
ゆく。

日本絵画史上の一枚を問われれば、
この絵を思い浮かべる。四百年前に

書かれたとは思われない、現代に通
ずる新しさを感じさせてくれる。何
故だろう。

それはこの絵の主眼が「松林」と
いう対象を描くことでなく、「見る」
行為そのものとは何かを、見る者に
問いかけているからだ。絵との距離
の変化に伴い、刻々と姿を変える松
林の姿、それは「見る」とは、そし
て「絵」とは何かを問う。その問い
に現代に通ずる新しさも内包される。
同時にこの絵は、わび、さびに代表
される独特の特質を熟成させてきた
室町以降の日本文化のエッセンスの
集大成とも言える。その文化的背景
の中に宗教としての禪宗がある。

大乘寺は長坂台、野田山の裾野に
ひろがる古刹である。境内は鬱蒼と
した緑につつまれ、静寂が支配して
いる。総門から山門へ、仏殿を通り、
回廊の奥の法堂へと、凛とした中に
も穏やかな空気を感ずる。

今回あらためて、寺の成り立ちを
示す伽藍配置図を見た。法堂、仏殿、
山門、総門、それぞれの要素によっ
て構成される同寸の三個の正方形が

松本 大

Text by MATSUMOTO Dai

建築家

都市環境マネジメント研究所 研究員

松本大建築設計事務所 代表

並列し、伽藍の配置を厳格に規定し
ている。そこに、普段感じる境内の
和やかな雰囲気とは違った、配置の
幾何学に則った厳格さに気づき、身
が引き締まる思いがした。

もともと、曹洞宗の伽藍配置は整
然とした構成とはしなかったらしい。
江戸・元禄時代のこの地への移転は、
二十六世月舟宗胡と二十七世中三道
白という二人の中興の祖の、宗統の
みだれを正し、道元の古式にかえそ
うとする宗統復古運動の流れの中
にあった。厳しい修行道場としての再
興、その想いのなかに厳格な伽藍配
置が導入されたのだろう。重要と思
うのは、このような伽藍の厳格性を
普段は余り感じないことだ。

これは、自然の中にあり、高低差

のある敷地
であること、

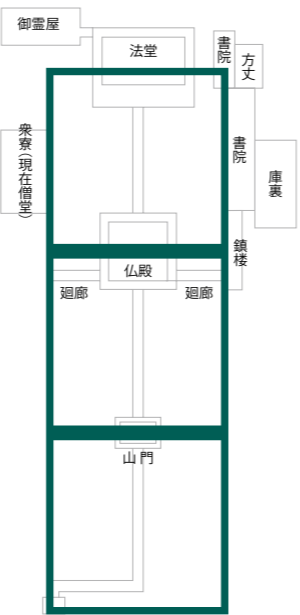
再々の増築に
よる部分もあ
るだろう。し

かし、同じ伽
賀藩ゆかりの
高岡、瑞龍寺

の壮麗な伽藍と比較してみると、
その差は歴然としている。瑞龍寺も
大乘寺と同じように、三個の正方形
が並列する伽藍配置をとっている。
しかし、利長の菩提寺として建てら
れたように、伽藍配置は可視的なも
のとして、藩主の偉大さを記念する
ものとして、機能している。

これに対して、大乘寺の伽藍配置
は厳格さを声高に主張しない。それ

は人里離れた豊か
な自然の中で、寺
院の独立性を指し
示すマイクロコスモ
スの表象として埋
め込まれている。
隠されたものとし
て、修行の場の意
味を問い続ける、
その構造の中に、
「宗教」とは何かを
問い、現代に新た



大乘寺現状伽藍分析図
(市史 かなざわ第9号より)

な展開を希求する大乘寺の姿を見た
ような気がしたのだ。

メモ 大乘寺

正徳2年(一八二九)に徹通義介禪師によつ
て開かれた曹洞宗の寺院。現在の伽藍は元禄
10年(一六九七)に加賀藩家老本多政長の援
助を受けて現在の長坂に再興されたものであ
る。

「規矩大乘」と呼ばれるように、曹洞宗の
名門修行道場として今なお、その名を馳せ、
第二の本山ともいわれる。

仏殿は国指定重要文化財に、法堂、山門、
総門は石川県指定文化財となっている。

